

## 久方の記

岡山大学 宰府 佛

本誌に寄稿するのは、数年ぶりであろう。なつかしくもあるが、筆をとる苦しみに懐かしさは通りこしてしまう。

頼まれてイヤといえず、その気の弱さを自責するばかりである。

学校の夏期休暇が7月11日から始まった。そこでしばしば、道ゆく人から「学校の先生は夏休みでエエデスナ」と羨望的に聞かれる。しかし夏休みなどあろう筈がなく、年20日の有給休暇があるのみである。日頃の雑用から解放されて、おおいに本を読み実験するのがこのシーズだそうだ。私自身、2年前にこの学校に転職した当時は、春、夏、冬の休暇に少なからず期待をかけたものである。悲しくもその思いはヌカヨロコビに終り、世人のこの質問に腹だたしく思うこともある。

しかし、学生が休暇だと教育的任務はなく、気分的にはいたってのんびりしたものである。

往來の途上、津島の運動公園の樹下で、真夏の太陽をさけて汗を拭い、涼を求めて1時の憩をたのしむのである。

亭亭とそびゆるポプラの大樹、一面にしきつめられた緑の芝生、黒色に照りかえるアスファルト、道路が曲折して動線をつくるこの公園は、冬は冷静、夏は情熱をその景観にもたしている。

古びた自転車を捨て、緑蔭に立ってしばし瞑想にふければ、南半球のメルボルン郊外、ヤラ河畔での散策の1日が脳裡に浮かびでるのである。何かしら離れ難い慕情を誘ったあの河畔、あの植物園は、この公園においてよみがえり、何かしら共通した森の精に魅惑されるのである。

絶えず手入れされ、見事に刈りこまれた芝生をみるにつけ、山野の牧草地と比較する意識が頭をもたげるのは、職業柄とはいえムードをこわすこと甚しい。1人苦笑するのである。

夏の牧草地は、牧草の生理現象からして、生育がとまり夏枯れ現象がおこるのは当然である。しかし、そこに雑草が侵入し、みるかげもない姿においては、

人の努力の足りなさを嘆かざるを得ない。最近、牧草地造成に不適な場所が、どんどんゴルフ場としてグリーンにかわりつつある。そして見事な芝地ができて上っているのである。

草地造成と比較して、ひとカケラのウップンが心に残るのを覚えるのである。

ゴルフ熱が高まるにつれ、グリーン研究所もできて芝生の造成維持管理の研究が積極的に行われていると聞いている。夢のような話である。

本県では昭和30年頃から草地造成が実施され、蒜山には大規模草地が造成され西日本唯一の草地県であろう。畜産発展のためよろこばしい限りである。

けれどもこれらの草地が本来の草地として、その生産力を発揮しているかといえば、必ずしもそうではない。かつての開拓政策のもとで、開墾ばかりが先行した例に近いものもある。

その責は誰にあるのであろうか。草地経営者なのか、指導監督した公共機関の関係者なのか、試験研究に従事する研究者なのか。

おそらくそれぞれの立場において、その責の一端を負わざるを得まい。

いまこそ草地開発の姿勢を正し、再出発すべき岐路にあると思う。けれども、しみじみと痛感することは、草地に関するすべての問題が十分に解明されていないということである。何にもまして、草地が経営農用地の一員として、価値生産をあげるにふさわしいものになることである。そのための研究が、集中的に実施されねばなるまい。

本県には、草地に関係する県営の機関が3つある。それは酪農試験場であり、和牛試験場であり、酪農大学校である。

草地開発の必要性を、観念的に論ずる指導者はたくさんいるが、草地の価値生産を実証する技術者は1人もいない。中国の山野は、中国山脈によって特異に形成されている。中国の草地を真剣にとりあげる研究者の出現を、まってやまない。